

K-BALLET

DaiwaHouse PRESENTS

TBS

熊川哲也 Kバレエカンパニー

Spring 2023

その女には、命を懸けて守りたいものがあつた——



世界が注目するジュリアン・マツケイ
出演決定！

“和”と“洋”の融合が生む、誰も想像し得なかった美がここに—— 世界に誇るべき“日本のグランド・バレエ”、堂々の再演!

2019年、熊川哲也がKバレエカンパニー20周年記念作品として挑んだのは

バレエで“日本の美”を描く——すなわち世界で最も有名な日本人ヒロインの悲恋物語

『蝶々夫人』の創造だった。プッチーニの傑作として名高い同名オペラに材を得て

全2幕のグランド・バレエに生まれ変わらせた本作は、“オペラのバレエ化”を遥かに超えた独創性に満ちている!

オペラにはない新たな物語を第1幕に置いたオリジナルのストーリー展開、大胆な音楽構成。

そして何より、熊川の卓越した美意識と創意に富んだ演出振付で表現される美しき日本の文化と精神性こそは、

この名作の物語に真実味をもたらし、観客の魂までも強く揺さぶるのだ。

バレエだからこそ描き出せる日本の美、深淵なる愛のドラマとは——その答えがここに!



Kumakawa's Production of Madame Butterfly Story

開国もない明治の長崎。武家に生まれた蝶々は、幼い頃に父が自害し家が没落、今は遊女見習いとして遊郭に身を置いている。一方、アメリカでは海軍士官ピンカートンが長崎への赴任を命じられ、恋人ケイトとの別れを惜しみつつ日本へと旅立つ。長崎にやって来たピンカートンは、仲間と共に遊郭を訪れる。あてやかな花魁道中に目を奪われる男たち。そんななか、ピンカートンはひとりの可憐な少女に出会い、心惹かれる。それは蝶々だった。ピンカートンのもとに嫁いだ蝶々は、この結婚が彼の赴任中の一時的なものであることを知らず、生涯の愛を捧げることを誓う。やがてピンカートンが帰国し数年が過ぎた。幼い息子と共に帰りを待ちわびる蝶々。だが、彼女の前に現れたのはピンカートンの妻となったケイトであった。すべてを知った蝶々が選り取った道とは……

演出・振付・台本：熊川哲也

原作：ジョン・ルーサー・ロング

音楽：ジャコモ・プッチーニ / アントニオ・ウォルサーク

舞台美術デザイン：ダニエル・オストリック

衣裳デザイン：前田文子 照明デザイン：足立雄



3月12日(日)
販売開始!

2023年 5/24(水) ~ 28(日) 東京文化会館 大ホール



飯島望未

堀内將平

成田紗弥

山本雅也

岩井優花

日程 開演	5/24(水) 14:00	5/25(木) 14:00	5/25(木) 18:30	5/26(金) 14:00	5/27(土) 12:00	5/27(土) 16:30	5/28(日) 13:00
蝶々夫人	飯島望未	成田紗弥	飯島望未	飯島望未	成田紗弥	飯島望未	岩井優花
ピンカートン	J・マッケイ	堀内將平	J・マッケイ	J・マッケイ	堀内將平	J・マッケイ	山本雅也
ススキ	荒井祐子	前田真由子	荒井祐子	荒井祐子	前田真由子	荒井祐子	荒井祐子
コロ	石橋奨也	伊坂文月	石橋奨也	石橋奨也	伊坂文月	石橋奨也	伊坂文月
花魁	浅川新織	日高世菜	浅川新織	浅川新織	日高世菜	浅川新織	山田 喬
ボンソウ	杉野 慧	宮尾俊太郎	宮尾俊太郎	杉野 慧	宮尾俊太郎	宮尾俊太郎	宮尾俊太郎
ケイト	日高世菜	小林美奈	日高世菜	日高世菜	小林美奈	日高世菜	戸田梨紗子
ヤマトリ	山本雅也	吉田周平	山本雅也	山本雅也	吉田周平	山本雅也	蘭野海斗



●ジュリアン・マッケイ Julian Mackay
米国モンタナ州生まれ、当時外国人最年少の11歳でボリショイ・バレエアカデミーに入学。ローザンヌ国際バレエコンクールで研鑽賞を受賞したのち、英国ロイヤル・バレエ団に入団。2016年、モハイロフスキー・バレエに移籍。世界の主要劇場でゲスト出演するほか、22年9月からはミュンヘン・バレエのプリンシパルとして活動中。現在24歳。容姿端麗にして傑出した実力を備えたこの若きスターは今や世界中の注目を集め、『VOGUE』『Numéro』誌が特集を組むなどモード界をも魅了している。

いま世界中から熱視線を浴びるバレエ界の貴公子
ジュリアン・マッケイ、熊川作品に待望の初主演!

指揮：井田勝大 音楽奏：シアターオーケストラ トーキョー

(料金(税込))

S席 ¥16,000 / A席 ¥12,000 / B席 ¥9,000 / C席 ¥7,000 / D席 ¥5,000

A親子席 ¥16,000 (大人1名+子供1名(5歳以上/小学9年生以下)) / A席エリア

学生券 ¥4,000 ※中学生以上25歳以下/当日学生証を提示の上引換購入/席は置未定

※A親子席・学生券はTBSチケット、チケットがA WEBにて取り扱い

〈お問い合わせ・ご予約〉 チケットスペース 03-3234-9999

〈チケット取り扱い〉 TBS チケット TBS チケット 検索

チケットスペース 03-3234-9999 (オペレーター対応) チケットスペースオンライン 検索

チケットぴあ <https://w.pia.jp/t/k-ballet/> (Pコード: 517-867)

ローソンチケット <https://l-like.com/k-ballet/> (Lコード: 35407)

イープラス <https://eplus.jp/kumakawa/>

東京文化会館チケットサービス 03-5685-0650 <https://www.t-bunka.jp/tickets/>

最新情報は Kバレエカンパニー で検索



©キャスト予定は2023年2月9日現在。出演者の病気や怪我など、やむを得ない事情により変更となる場合があります。最新のキャスト情報は <https://k-ballet.co.jp/company/> にてご確認ください。公演中止の場合は、公演中止の旨を最速でお知らせいたします。公演中止の場合は、チケット代金の払い戻し、公演日や座席の変更は原則としてお受けできませんので、あらかじめご了承ください。◎公演中止の場合の公演、チケット送料等の補償はいたしません。◎本公演は5歳以上の入場が可能です。◎18歳未満は必ず保護者の同伴が必要です。◎演出上関係者の入場は制限されています。◎開演は開演の45分前。

主催：TBS 特別協賛：大和ハウス工業株式会社 協賛：(株)ANA
オフィシャルエアライン：ANA 制作：K-BALLET / TBS

Photography: Yuzuki Iwano / Hidemi Iwano

本公演における新型コロナウイルス感染症対策などの最新情報につきましては、Kバレエカンパニー公式HPをご確認ください。

“和”と“洋”の融合が生む、誰も想像し得なかった美がここに—— 世界に誇るべき“日本のグランド・バレエ”、堂々の再演！

Kumakawa's Production of
Madame Butterfly
Story

2019年、熊川哲也がKバレエカンパニー20周年記念作品として挑んだのは、バレエで“日本の美”を描く——すなわち世界で最も有名な日本人ヒロインの悲恋物語「蝶々夫人」の創造だった。プッチーニの傑作として名高い同名オペラに材を得て、全2幕のグランド・バレエに生まれ変わらせた本作は、“オペラのバレエ化”を遙かに超えた独創性に満ちている。オペラにはない新たな物語を第1幕に置いたオリジナルのストーリー展開、大胆な音楽構成。そして何より、熊川の卓越した美意識と創意に富んだ演出振付で表現される美しき日本の文化と精神性こそは、この名作の物語に真実味をもたらし、観客の魂までも強く揺さぶるのだ。バレエだからこそ描き出せる日本の美、深淵なる愛のドラマとは——その答えがここに！

開国まもない明治の長崎。武家に生まれた蝶々は、幼い頃に父が自害し家が没落、今は遊女見習いとして遊郭に身を置いている。一方、アメリカでは海軍士官ピンカートンが長崎への赴任を命じられ、恋人ケイトとの別れを惜しみつつ日本へと旅立つ。長崎にやって来たピンカートンは、仲間と共に遊郭を訪れる。あてやかな花魁道中に目を奪われる男たち。そんななか、ピンカートンはひとりの可憐な少女に出会い、心惹かれる。それは蝶々だった。遊郭を取り仕切るゴローと遊女たちの世話役スズキの勧めにより、ピンカートンは蝶々を現地妻として娶ることを決める。ピンカートンのもとに嫁いだ蝶々は、この結婚が一時的なものであるとは知らず、生涯の愛を捧げることを誓う。改宗までした蝶々に叔父のボンゾウは激怒し、彼女を助言する。蝶々はピンカートンの愛しさに惹かれ、ふたりは初めての夜を過ごす。ピンカートンが帰国し数年が過ぎた。幼なじみのヤマトリの求婚を断り、幼い息子と共に帰りを待ちわびる蝶々。だが、彼女の前に現れたのはピンカートンの妻となったケイトであった。すべてを知った蝶々が選んだ道とは……。



愛と死をめぐる、新たなるドラマティック・バレエの傑作

華麗に着飾った花魁が高下駄で八文字を踏んで練り歩く“花魁道中”。その豪華な行列が美しく艶やかなバレエになるといった誰が想像し得ただろうか？

熊川哲也 演出・振付「蝶々夫人」の見せ場の一つ。花魁役のバレリーナはもちろん高下駄は履かない。履くのはバレエの象徴とも言えるトゥ・シューズだ。扇を持った可憐な新造たちの群舞に囲まれた花魁は、まるで八文字を踏むように左右に身をひねりつつ、トゥ・シューズでスッと立つ。バレエと日本を融合させたその艶やかさには、ピンカートンでなくとも虜になってしまうだろう。熊川哲也の巧みな手腕が表れた見事なダンス・シーンである。

舞台は開国まもない明治の長崎。米海軍士官ピンカートンが美しい少女・蝶々を見初め、結婚式を挙げる。オペラは2人の結婚式から始まるが、熊川はオペラが幕を開ける前のストーリー——長崎に赴任する前のアメリカ時代のピンカートン、そして蝶々との出会いを丁寧に描く。やがてピンカートンは任務を終えて帰国するが、蝶々は生まれた息子と共に彼の帰りを

待ち続ける……。

自ら育てた偉大なクラシック・バレエの伝統に敬意を抱き続ける熊川は、この「蝶々夫人」の物語に“東洋の「ジゼル」”を見出した。この偉大な古典と同じように、恋人を裏切ったピンカートンは後悔の念に苦しみ、蝶々はそれでも彼を許し、優しく包み込む。最後の哀切なバド・ドゥ、そして衝撃のラストへ——。熊川の慧眼が、名作オペラから愛と死をめぐるドラマティック・バレエを生み出してみせたのだ。必見の傑作である。

今回、躍進著しい飯島望未が蝶々に挑む。ロシア仕込みの華麗なテクニックと甘いマスクで人気のジュリアン・マッケイがピンカートンを踊るのも見逃せない。「ハーリー・ポッターと呪いの子」などで俳優として新境地を見せる宮尾俊太郎が久々にバレエの舞台に復帰し、蝶々の叔父・ボンゾウに扮するのも話題だ。2019年の初演でも蝶々を踊った成田紗弥と期待の若手・岩井優花にも注目。Kバレエカンパニーの個性豊かなダンサーたちが紡ぐ舞台に期待が高まるばかりだ。

文：浜野文雄（新書新「ダンスマガジン」編集委員）

